聖トマスに於けるesseとexistereについて（承前）

——existereの意味の探求・第四、トマスの用法(三)——

山田晶

三一

次に㈢「立つ」の意味が一般化しかつ弱まつて、何らかの意味での「立つ」ことを示す爲に、補語を必要とする場合を考察する。——㈡の場合に於ては、エクシステレの「立つ」の意味は一般化されて居るが、それでもなおスブシステレやコンシステレの同義語として、一般的意味での「立つ」ことを、その語自體によつて示して居る。從つて補語なしに獨立に用いられ得たのである。ところが「立つ」の意味がもつと弱まると、この語は獨立的にではなく、何らかの補語をともなつて用いられるようになる。そしてその意味は「——として、立つ」或は「——として存立する」である。而してこの「——として」を示す補語は名詞或は形容詞である。以下順次に用例を以て示す。

（a）補語として名詞を伴う場合——この時エクシステレは「——として存立する」「——として存在する」「——としてある」などと譯される。たとえば對異教徒大全第三卷序文に、「神は…萬有の統治者としてエクシステレする（omnium entium rector existat）」[1]云々。また同書同卷七五章に、「すべての二次的原因は、それらがまさに原因としてエクシステレすることに於て（in hoc quod causae existunt）神の類似をかくとくする」[2]云々。また神學提要第一卷二三八章に、「キリストの復活は我々にとつて、我々もまた復活するであろうという希望の保證

として エクシステンスする (argumentum spei····existeret)(三)」云々。また同書第二卷四章に、「子供たちは親の模倣者として エクシステンス (imitatores parentum existere)(四) すべきである」云々。また神學大全第二部の二、七一論題二項に、「自分自身正義を輕蔑する人が、他人の正義の辯護者として エクシステンス (alterius iustitiae patronus existere) することはできない(五)」云々。またヨハネ福音書註解第四章に、「彼らは漁夫や賤民や天幕職工として エクシステンスして居た (piscatores et humiles extiterant, et tabernaculorum factores)(六)」云々。——これらの用例に於て、一應「——として エクシステンスする」と譯したその「——として」の補語は、常に主語の同格として主格をとって居る。そして「——として存立する、存在する、ある」などと譯すことができる。たとえば第一例、「神は萬物の統治者として存立する、存在する、或は、ある」。以下同樣である。

(一) III Gent. Proe. Necesse est igitur ut Deus, qui est in se universaliter perfectus, et omnibus entibus ex sua potestate esse largitur, omnium entium rector existat, a nullo utique directus. 英譯第三卷 Consequently God ····must needs be the Ruler of all, Himself ruled by none. (p. 2) 獨譯第三卷 Notwendig muß daher Gott, der in sich····, als Lenker aller Seinsdinge existieren,····(S. 3)

(二) III Gent. c. 75. Omnes causae secundae, in hoc quod causae existunt, divinam similitudinem consequuntur, ····英譯第三卷 Every secondary cause, by the mere fact of its being a cause, attains to a likeness to God,···· (p. 185). 獨譯第三卷 Alle Sekundärursachen erlangen gerade dadurch, daß sie Ursachen sind, die Ähnlichkeit mit Gott,····(S. 426).

(三) I Compend. theol. c. 238, n. 508. Christus resurrectionem anticipavit, ut eius resurrectio argumentum nobis spei existeret, ut nos etiam resurgere speraremus,····

(四) II Compend. theol. c. 4, n. 555. Debent etiam filii imitatores parentum existere, unde qui patrem Deum confitetur, debet conari ut Dei imitator existat.

(五) II-II, q. 71, a. 2. Non enim decet ut alterius iustitiae patronus existat qui in seipso iustitiam contempsit. 英譯第二卷 for it ill becomes one who has disdained to be just himself, to plead for the justice of another.

(p. 1498).

(六) In Ioan. c. 4, n. 570. Sed quaeret fortasse aliquis, quae necessitas fuerat assuescere discipulos ad humilitatem, quia piscatores et humiles extiterant, et tabernaculorum factores, なお若干例を附加する。——(1) De verit. q. 11, a. 3. Homo autem, quia secundum ordinem naturae alteri homini par est in specie intellectualis luminis, nullo modo potest alteri homini causa scientiae existere. 或人が他人に對してその知識の原因としてエクシステレする。——(2) De verit. q. 17, a. 2. Cum autem actus sit particularis, et synderesis iudicium universale existat; non potest applicare iudicium synderesis ad actum, nisi fiat assumptio alicuius particularis. シュンデレーシスは普遍的判斷としてエクステレする。——(3) In VII Eth. Nic. l. I, n. 1300. Non videbatur mortalis hominis existere filius sed Dei, 可死的人間の子としてではなく神の子としてエクシステレする。

(b) 補語として形容詞を伴う場合。——たとえば對異教徒大全第四卷五四章に、「或條件に關しては、人間は或被造物よりも劣つた〔ものとして〕エクシステレする (existat inferior)(七)」云々。また眞理論第二九論題三項異論解答三に、「キリストの恩寵は全般的に充滿した〔ものとして〕エクシステレする (plena existit)(八)」云々。また神學提要第一卷一二四章に、「或被造物はその善性に於て〔他の被造物よりも〕より完全な〔ものとして〕エクシステレする (perfectiores existunt)(九)」云々。またニコマコス倫理學註解第五卷一講に、「或人は健康な〔ものとして〕エクシステレする者のように歩む時に (sanus existit)、健康に歩んで居るといわれる(一〇)」云々。また隨意論題集第三卷六論題三項に、「危險に於ても安全な〔ものとして〕エクシステレする (securus existere) ことのできるような德(一一)」云々。——これらの用例に於て今我々は一應「——なものとして」を補つて、「劣つた、充滿した、より完全な、健康な、安全な〔ものとして〕エクシステレする」というように譯したが、それは日本語として形容詞とエクシステレとを直接に結合することができないからである。然しラテン語では「劣つた」「充滿した」「より完全な」「健康な」「安全な」等の形容詞が直接にエクシステレに附加されてエクシステレを限定して居る。——さて我々はエクシステ

トモ名詞ヤ形容詞トノリノヨウナ表現ヲ、次ノヨウニ説明スル。すなわちリの場合のエクシストは最も広い意味での「立つ」ことを示して居る。ところで最も広い意味での「立つ」とは、他者から区別されたそのものの「として」あることに外ならぬ。而してそれがしかるに「そのとして」或はしかるに「性質として」あるかを限定するものが相語である。しかるに「その」として何かを示す意味は、（a）例の如く名詞が、しかるに（広い意味での）「性質」として何かを示す意味は（b）例の如く形容詞が相語として用いられるのである。

（七）IV Gent. c. 54. Quamvis autem quantum ad aliquas conditiones homo aliquibus creaturis existat inferior; ····tamen secundum ordinem finis, nihil homine existit altius nisi solus Deus,····訳註第四卷 Now, though in certain respects man is indeed below some creatures,····nothing is above man, save only god,····(p. 200)

（八）De verit. q. 29, a. 3, ad 5. nunquam potest adaequare gratiam Christi, quae universaliter plena existit.

（九）I Compend. theol. c. 124, n. 243. Secundum hoc enim aliquae creaturae superiores dicuntur quod in bonitate perfectiores existunt,····

（一〇）In V Eth. Nic. l. I, n. 891. sicut dicimus, quod aliquis sane ambulat, quando ambulat sicut ille qui sanus existit.

（一一）III Quaest. Quodl. q. 6, a. 3. tantam virtutem per quam posset etiam inter pericula securus existere,····なお訳註同巻参照。——① III Gent. c. 97. Unde in formis differentia esse non potest nisi secundum quod una perfectior existit quam alia. 「かの形相相互の形相よりもより完全な〔そのとして〕ヨクシストする。——② I Compend. theol. c. 213, n. 423. Oportuit igitur Verbum Dei incarnatum perfectum in gratia et in sapientia veritatis existere. 神の言葉の受肉は恵みと真理とに完全な〔そのとして〕ヨクシストする。② I Compend. theol. c. 214, n. 424. non autem omnis qui habet aliquid gratis datum, gratus danti existere. 何かを無償で与えられた者がすべてその与え人に恵まれる〔そのとして〕ヨクシストするとは限らない。——③ In III Eth. Nic. l. 16, n. 564. propter fugam opprobrii, quod turpe existit. 恥辱から〔そのとして〕ヨクシストする。——④ In V Pol. l. 4, n. 774. Unde illos qui erant magis sagaces et meliores in populo, quoniam bellicosi existebant, populus praeficiebat, et principabantur tyrannice. 好戦的な〔そのとして〕ヨクシストする。——⑥ In Ioan. c. 17, n. 2226. grave enim est ut

homo inter malos existentes a malo immunis existat, praecipue cum totus mundus in maligno positus est. 悪人たちのうちに居る人間が悪から清されずにエクシステレすることはむつかしい。——(7) De occ. oper. n. 448. et sic semper ascendendo, quanto formae specificae sunt nobiliores, tanto virtutes et operationes ex eis procedentes excellentiores existunt. 形相がより高貴となればなるほど、ますますその形相から發する能力とはたらきとはよりすぐれた［もの］として］エクシステレする。

（c）さて我々は（a）（b）に於ける名詞ないし形容詞を補語にとるエクシステレをば、最も廣い意味での「立つ」を意味するものと解釋したのであるが、このエクシステレはまた「存在」を意味するものと解することもできる。その場合補語はすべて「—として」と譯される。たとえば（a）の諸例は、「神は萬有の統治者として存在する」「原因として存在する限りに於て」「人間は他人に對して知識の原因として存在することはできない」等々。（b）例も同様に「—なものとして存在する」或は「—に、で存在する」などと譯すことができる。たとえば「劣つたものとして存在する」或は「劣つて存在する」、「充滿したものとして存在する」或は「充滿して存在する」等々。更にこのエクシステレを單に「ある」と譯すこともできる。すなわち「統治者としてある」「原因としてある」「劣つたものとしてある」「充滿してある」等。ところで「—としてある」とは「—である」ということに外ならぬ。すなわち「統治者としてある」とは「統治者である」ことであり、「原因としてある」とは「原因である」ことであり、「劣つたものとしてある」とは「劣つて居る」ことに外ならぬ。とすれば、これらの用例に於けるエクシステレは、通常の主語と述語とを結ぶ繫辭としてのエッセと置換えても何ら差支えないように思われてくる。たとえば「神は萬有の統治者としてエクシステレする」（Deus existit omnium entium rector.）のエクシステレのかわりにエッセを置けば Deus est omnium entium rector. となり、これすなわち「神は萬有の統治者である」ことに外ならぬ。他の諸用例もすべて全く同様である。このようにこれら補語をとるエクシステレが「である」表示のエッセと置換され得るこ

とは、これらの用例の近代語譯が殆んどすべて、これらのエクシステレに特別の意味を附することなく、簡單に通常の繫辭と述語との關係のように譯して居ることからも、支持されるように思われる〔前註(一)(二)(五)(七)に附せられた英獨譯參照〕。

そこで次の疑問が生ずる。すなわち、このように名詞や形容詞を補語としてとるエクシステレは、名詞ないし形容詞を述語とする繫辭としての「である」のエッセと全く同じ意味と解してよいであろうか、と。――これに對して我々は答える。エッセのかわりにエクシステレが用いられる場合は、單に「―である」の意味だけではなくて、やはりその主語の存立性、すなわちその主語がその主語「として他と區別されてある」ことが強調されて居る、ようである。たとえば「神は萬有の統治者としてエクシステレする」〔註(一)參照〕というのは、單に「神は萬有の統治者である」というのとは意味が異る。その相違は次の點に存する。すなわち後の文に於ては、神に屬する或性格がエッセを媒介として神に歸屬せしめられるだけにすぎないが、前文に於てはやはり強調點は「システレ」ということの方にあつて、主語がいかなるものとしてシステレするかという、そのシステレの仕方を限定する爲に名詞が附加されて居るのである。――それにもかかわらずこの二つの文の意味が非常に近いということは否定できない。そしてシステレの意味が更に一般化する時、遂にエクシステレは「である」のエッセの代用となる。かゝる用法はエクシステレの分詞エクシステンスに於てあらわれる。それは次の場合である。

三二

次に(四)の場合を考察する。――エクシステレが名詞形容詞を補語にとることは、それだけこの語の意味が繫辭のエッセの意味に近づいて居ることを證據立てる。それはまたエクシステレのシステレの意味が、それだけ一般化して居ることを示す。この傾向がきわまると、ついにエクシステレは繫辭のエッセの代りに用いられるようになる。尤もエ

クシステレが定動詞として使用される場合は、既に述べられたように「前章（c）項」エッセと區別された特別の意味（すなわち主語の存立性の強調）を含んで居る。然しこの動詞の分詞形エクシステンス（existens）は、時には繫辭「である」のエッセの分詞形エンス（ens）の代用として用いられる。このようなエクシステンスはとりたてゝ存立性の意味を含まず、全く繫辭のエッセの代用とみなすより外はない。然しエクシステンスがいつもそのように使用されるわけではないから、繫辭のエッセの代用としてのエクシステンスを説明する前に、トマスに於けるエクシステンスの用法全般をまづ説明しよう。

近代語に於てもそうであるようにラテン語に於ても、動詞の分詞形は形容詞として用いられるとともにまたそれ自體獨立の名詞としても用いられる。エクシステレの分詞エクシステンスについても同様である。すなわちそれは或場合には形容詞として何らかの名詞につき、その名詞をそのエクシステレの意味に從つて形容する。この場合のエクシステンスは「エクシステレするところの」云々と譯される。そしてエクシステレには上述の種々な意味があるから、それらの意味に從つて時と場合に應じて「存在するところの」「生成するところの」「から出てくるところの」「あらわれるところの」等々と譯される。ところがそれが名詞として用いられる場合には、それは「エクシステレするところのもの」を示す。すなわちエクシステンスといえば「存在するもの」「生成するもの」「出現するもの」等々を示し得る。然し實際にはエクシステンスが名詞として用いられる場合には、それは大抵第一の意味、すなわち「存在者」の意味で用いられ、エッセの分詞エンス（ens）と置換えられ得る場合もある。また主に一般名詞として中性的に用いられるが、時には存在する「人」を示す爲に男性ないし女性として用いられる場合もある。また複數形もしばしば用いられる。中性複數形はエクシステンチア（existentia）であり、男女複數形はエクシステンテス（existentes）である。またこの語は分詞として動詞的性格を保持して居るから、名詞的形容詞的いづれの用法の場合にも、その動詞的意味を限定する副詞ないし副詞節や副詞句をとり得る。――以上はエクシステンスの意味及び文法的性格の一般的説

明であるが、以下にこれを三辭に分けてトマスの用例を用いて説明する。すなわち（a）エクシステンスが名詞として用いられる場合。（b）形容詞として用いられる場合。（c）同じく形容詞として用いられて居るが、たゞその場合のエクシステレの意味は、これまで考察してきたこの語のどの意味にも屬せず、むしろ繫辭としてのエンスの代用としてのみ理解され得る場合。この場合から我々は逆に繫辭としてのエッセ〔である〕と同じ意味がエクシステレにあることを發見する。而してこの意味こそは本章に於て主に論ぜらるべきものである。然しこの意味でのエクシステンスを他の意味でのエクシステンスから區別して、それによつて一層明瞭にこの意味でのエクシステンスの獨自性を理解し得る爲に、まづそれと區別された（a）（b）の用例から考察することにする。また（b）と（c）との間に（b）とも（c）とも解釋され得るエクシステンスの若干の用例があるから、それを（b′）とする。

（a）エクシステンスが名詞として用いられる場合。――この時この語は主に「存在者」を意味する。たとえば能力論第五論題九項異論十に、「元素は單にエクシステンチア〔エクシステンスの中性複數〕にすぎぬが、植物はなおその上に生きて居り、動物はなおその上に認識する」[一]云々。こゝで自然物を三つの段階に分けて、單に存在して居るだけのもの、存在するのみならず生きても居るもの、なおその上に認識もするものに區分して居るのであるから、この場合のエクシステンチアが、生物（vivens, viventia）認識者（cognoscens, cognoscentia）に對して、單に存在するだけのものという意味での存在者を意味して居ることは明である。またコロサイ書註解第一章に、「すべての認識はエクシステンスに終局する。すなわちエッセを分有して居る何らかの本性に終局する」[二]云々。すなわちこゝでは、すべての認識はエクシステンスの認識であるといわれて居る。而してエクシステンスの意味を説明して、それは「エッセを分有する何らかの本性」(aliqua natura participans esse) といわれて居る。かゝるエクシステンスはエンス（有）と同義である。またエクシステレする人を示す爲に男女性的に用いられる場合もある。たとえば「危險のうちにある人々」[三] (in periculis existentes)、及びこれに類する多くの用例がある。

(一) De pot. q. 5, a. 9, ob. 10. elementa sunt tantum existentia, plantae autem etiam vivunt, animalia vero etiam super haec cognoscunt. なお類同のこと——① II Sent. d. 9, q. I, a. 8, ob. I. Secundum Dionysium····distinguuntur quatuor gradus rerum : scilicet intellectualium, in quo comprehenduntur angeli ; rationalium, in quo sunt homines ; sensibilium, in quo sunt bruta animalia, et existentium, in quo sunt res insensibiles. ディオニシウスによれば事物には四段階がある。最理的なもの(intellectualia)、理性的なもの(rationabilia)、感覚的なもの(sensibilia)、存在するもの(existentia)。

(二) In Ad Col. c. I, n. 30. omnis cognitio terminatur ad existens, id est ad aliquam naturam participantem esse. なお類同のこと——① I Sent. proel. q. I, a. I, ad I. philosophia determinat de existentibus. 「哲学はエクシステンティブスについて定める」という場合のエクシステンティブスは直接的に「存在するもの」やはなく、その用語はその前に存する。すなわちエクシステンティブスは第一の名詞として、単に「存在するもの」ではなく、寧ろ「或るものはあるもの」を意味する。或は同じくその意味や「あるもの」はなくてエクシステンティブスである。それは直接的に「あるもの」、「それはそれ自身存在するもの」のみならず、それはそれ自身「あるもの」なわち存在の原理をもエクシステンティブスである。また存在する「あるもの」のみならず、存在する事柄の意味や観念をもあるものとして思惟されるものをもあるもの、ふくめるものとして「あるもの」やある部分に属するエクシステンティブスである。そしてかくして「あるもの」やある部分に属するエクシステンティブスは「存在するもの」を含む。「あるもの」はそれと同じくエクシステンティブスである意味や「存在するもの」やあるという意味では、エクシステンティブスはエクシステンティブスと直接的に同一のものをもつのである。今ここでは主として存在はエクシステンティブスというその存在はエクシステンティブスのもつ意味を表わすものである。或はエクシステンティブスを存在者と解するならば、それは名詞的動詞である。しかしエクシステンティブスを存在、「存在する」と解するならば、それは本来動詞である。——なおこの節に関しては第千五百九十五節及び第千六百九十六節参照。

(三) In III Eth. Nic l. 17, n. 577. なお同類のこと——① II Quaest. quodl. q. 7, a. 2. illuminat omnes in domo existentes. 家にあるすべての人を照らす。——② V Quaest. quodl. q. 9, a. 1, ob. 1. in periculo mortis existens 死の危険のうちにある人。——③ In II Pol. l. 13, n. 299. in insula maris existentes 海の島にある人々——④ In Matt. c. 6, n. 622, existentes in tribulatione 患難のうちにある人々——⑤ In Ad Phil. c. I, n. 13. in vinculis existens 獄にある人。

第十八節参照 esse と existere のこと（表面）

（b）エクスステンスが形容詞として用いられる場合。――この時エクスステンスは何らかの名詞につき、その名詞と性數格を一致せしめ、「エクスステンするところの」という意味になる。そしてエクスステンには前述の種々なる意味があるから、時と場合とに應じて「存在するところの」「から出てくるところの」「生成するところの」「あらわれるところの」などと譯される。かゝるエクスステンスの用例の若干は、既にこれまでの論述のうちに引用された。この用法はトマスの著作に於てはきわめて一般的であつて、殆んど枚擧にいとまないほどであるから、目についたこく典型的な例を若干あげる。――エクスステンが廣い意味での存在を示す場合。たとえば「實在界に存在して居る何らかのもの(aliquid in rerum natura existens)」[四]、「地獄に居る罰せられた者 (damnati in inferno existentes)」[五]、「母の胎内に居るヨハネス(Ioannes in utero matris existens)」[六]、「物體のうちにある性質(qualitatem in corporibus existentem)」[七]、等、――「からでてくる」を意味する場合。たとえば「始源から出てくる何らかのもの (aliquid ex principio existens)」[八]、「無から生ずる自然 (natura ex nihilo existens)」[九]、「他者から發出するペルソナ (persona ab alio existens)」[一〇]等々。其他エクスステンの種々なる意味に應じてエクスステンスの意味ができる。――またかゝるエクスステンスは、それが附加する名詞とともに奪格になつて、いわゆる奪格別句 (ablative absolute) を形成することもある。その場合は前後の事情に應じて種々に譯される。たとえば「眼のうちに白そのものが現存するわけではないけれども (non existente ipsa albedine praesentialiter in oculo)」[一一]。

（四）De anima. q. 1, a. 4. 既出第五章註（一）參照。

（五）VIII Quaest. quodl. q. 7, a. 1, ad 2.

（六）In loan. c. 1, n. 255.

（七）In X Eth. Nic. l. 5, n. 2015. 類例を付加する。――(1) In De sensu. l. 6, n. 89. qualitatem in corporibus existentem 物體のうちにある性質――(2) In De momor. l. 7, n. 388. magnitudines existentes 存在する大きさ――(3) In I Pol. l. I, n. 23. propter aliqualem malam consuetudinem in aliquibus terris existentem 或土地に存在する或惡

習の故に――(4) In III Pol. l. 12, n. 463. per aliquod divinum in homine existens 人間のうちに存する或神的なもの によつて――(5) In Ad Rom. c. 2, l. 4, n. 225. gentem illam in dispersione existentem 分散して居るあの民族を――(6) In I Ad Cor. c. 12, n. 714. hominem in peccato mortali existentem 大罪のうちにある人間を。

(八) I. q. 42, a. 2. 既出第二三章 註(一)参照。

(九) De pot. q. 5, a. 1, ob. 16. 既出・第二三章 註(二)参照。

(一〇) I q. 43, a. 8.

(一一) In I Ad Cor. c. 13, n. 800. 既出・第二九章 註(二)参照。

(b′) ところで同じくエクシステンスが形容詞として用いられる場合であるが、その場合のエクシステレが「存在」や「出現」や「生成」や「現存」ではなくて、前章で第三の場合として考察したところの、名詞或は形容詞を補語として「――として存立する、存在する、ある」を意味すると解される場合は特に注意を要する。かゝるエクシステレが分詞となる場合には、やはり名詞か形容詞を補語として、しかも補語をともなう分詞そのものが或名詞に附加されて「――として存立（存在する、ある）ところの」云々というようにその名詞を限定する。またその名詞の性數格に應じて變化する。たとえば神學大全第二部の二、九四論題一項異論三に、(一二) Ergo idolatria, quasi nihil existens, non potest esse superstitionis species. また同書第一部五五論題一項異論解答三に、(一三) cum angeli essentia, finita existens, secundum propriam rationem ab aliis distinguatur,....前例に於て、「無」(nihil) はエクシステンスの補語であり、そのエクシステンスはまた「偶像崇拜」(idolatria) にかゝる形容詞と解される。よつて全部の意味は、「故にいわば無としてあるところの偶像崇拜は、迷信の一種ではあり得ない」。これはエクシステンスが名詞を補語にとる場合である。また第二例に於て、「有限な」(finita) という形容詞はエクシステンスの補語であり、そのエクシステンスはまた「本質」(essentia) にかゝる形容詞と解される。よつて全文を譯すと、「有限な「ものとして」あるところの天使の本質は、その固有の本性に從つて他者から區別されるから」云々。――ところで我々はこの二つ

の用例に於けるエクシステンを頼いて前節第三の場合にあてはめて「――として存立する（存在する、ある）」などの意味にとつたのであるが、この場合のエクシステンに存立性の意味をみとめず、むしろ「である」のエッセと同意味にとることも可能である。もしそのようにとることが許されるとすれば、名詞ないし形容詞を補語とするエクシステンは「――であるところの」云々と譯すことができる。そのようにとつて前文を譯し直すと、第一例は、「いわば無であるところの偶像崇拜は」云々、第二例は、「有限であるところの天使の本質は」云々となる。更にこのエクシステンスを「である」意味の分詞と解すれば、それは英語の being と同じ意味であるから、英語の例にならつて〔上文のエクシステンスを being として英譯すれば、第一例は idolatry, as it were being nothing,‥‥第二例は、the angel's essence, being finite,‥‥となる〕「偶像崇拜は、いわば無にひとしいものであるから」云々、「天使の本質は、有限であるので」云々というように理由句として譯すこともできる。

（一二）II-II q. 94, a. 1, ob. 3. 英譯第二卷 Therefore since idolatry is like to nothing, it cannot be a species of superstition. (p. 1595). 類例を付加する。――(1) In loan, c. 2, n. 364. multa miracula facta a Christo adhuc puero existente,‥‥まだ少年であつたところのキリストによつてなされた多くの奇蹟、云々。

（一三）I q, 55, a. 1, ad 3. 英譯第一卷 because the angelic essence, as being finite, is distinguished by its own formality from other things,‥‥(p. 278) 佛譯第二卷 Car l'essence de l'ange étant finie, elle se distingue des êtres par sa nature propre,‥‥(p. 383) 類例を付加する。――(1) I q. 44, a 2. A principio enim quasi grossiores existentes, non existimabant esse entia nisi corpora sensibilia. 彼らははじめは粗雑であつたから、可感的物體だけが存在であると考えて居た。英譯第一卷、At first being of grosser mind, they‥‥(p. 230) 獨譯第四卷 Denn am Anfang, wo sie gleichsam noch gröber waren,‥‥(S. 8) 佛譯第二卷 lorsqu'ils étaient absolument grossiers, (p. 221)――(2) I q. 68, a. 4, ad 1. Unde una tera existente, multi caeli ponuntur,‥‥故に地は一であつたも、多くの天があるとされる。――(3) De verit. q. I, a. 6. Si Socrate existente albo, intelligatur albus esse, verus est intellectus. ソクラテスが白い場合に、ソクラテスは白いと解されるならば、その理解は眞である。――(4) De malo. q. 7, a. 3, ad 11. eadem

numero existens potest transferri de imperfectiori ad perfectius. 数的には同一でありながら、不完全からより完全なものへとうつりうる——(5) II-II q. 10, a. 4. sed contra, de Cornelio adhuc infideli existente…まだ未信者であつたところのコルネリウスについて、——(6) In I De caelo, l. 13, n. 131. esset enim possibile totum esse infinitum, una parte existente infinita secundum magnitudinem, et aliis existentibus finitis. たとい他の諸部分は有限であるとしても、一部分が大きさに於て無限であるならば、全體が無限であることは可能であろう。——(7) In IV Pol. l. 10, n. 628. medii in civitate sunt optimi, et possessio ipsorum media existens, optima est inter omnes. 國家の中流階級は最善である。また彼らの所有は中位であるから、すべてのうち最善である。——(8) In Ad Rom. c. 4, n. 340. Abraham, adhuc incircumcisus existens, iustificatus est per fidem,…アブラハムは、まだ無割禮であつたところに、信仰によつて義とされた。

(c) さて前項(b′)の諸用例は、そのエクシステレをば、「——として存立する、存在する、ある」の意味にとつても、また通常の「である」のエッセと同じ意味にとつても、どちらでも理解できる例であつたが、以下の諸例は前の意味では理解できず、是非とも後の意味に、すなわち「である」の繫辭の意味にとらなければならない。すなわち神學大全第三部六九論題八項異論解答三に(一四)、omnes homines, eiusdem speciei existentes, in forma conveniunt. この eiusdem speciei は屬格である。故にさきの諸用例に於けるように、これをエクシステンテスの補語として、そのエクシステンテスが「人間」(homines) にかゝるように譯すことはできない。このエクシステンスは「である」のエッセの分詞の代用ととることによつてのみ理解され得る。すなわち omnes homines sunt eiusdem speciei.「すべての人間は同一の種に屬して居る」という普通の文章を、このエッセを分詞にして「同一の種に屬して居るところのすべての人間」といおうとすれば、このエッセの分詞形エンスを用い、それを「すべての人間」の性數格に合せて omnes homines eiusdem speciei entes といえばよいわけであるが〔英譯すると、all men being of the same species とする如くである〕、トマスは通常このような場合にエッセの分詞形としてのエンスを用いず、エクシステンスを用いる。從つて上記の文は omnes homines eiusdem speciei

existentes となる。故にこの場合のエクシステンスはエンスの代用であつて何ら特別に存立とか存在とかの意味を含まない。またこの分詞は前後の連関に應じて、時には現在句のように譯すことができる。よつてその用例の全文を譯すと次のようになる。「すべての人間は、同一の種に屬するから、形相に於て一致する」。――また講義大全第一部二三論題二百第編解答四に、gratia non ponitur in definitione praedestinationis, quasi aliquid existens de essentia eius. これはさきにも注意した例であるが（第二三論題第五、第四三九論三五）、この existens de ～ は「――から出てくる」の意味ではなく、「――に屬する」の意味である。なぜそうなるかというと、aliquid est de essentia eius.「何かがその本質に屬する」。この文の繫辭のエストを分詞にすると、aliqu'd de essentia eius ens「その本質に屬するところの何か」となるわけだが、この場合エストはエンスのかわりにエクシステンスを用いて aliquid de essentia eius existens というのである。故にこのエクシステンスには「存在する」とか「から出てくる」とかいうような特別の意味があるわけではなく、ただ「である」のエッセの分詞形エンスの代用にすぎないのである。よつて用例の全文を譯すと、「感覺は予定の本質に屬する何かとして予定のうちに指定されるものではない」。

（一四）III q. 69, a. 8, ad 3. 英譯第二卷 Since all men, being of one species, are of one form. (p. 2114) 類例を附加する。――① I q. 28, a. 2. relatio realiter existens in Deo habet esse essentiae divinae, idem omnino ei existens. 神のうちに實在的に存在する關係は神の本質のエッセを持つて居り、それと全く同じものである。英譯第一卷 the existence of the divine essence in no way distinct therefrom. (p. 153). 獨譯第三卷 und ist ganz und gar ein und dasselbe mit ihr. (S. 30) 佛譯第一卷 et ne faire qu'une seule et même chose avec son essence. (p. 529) ――② II Gent. c. 95. In rebus enim materialibus quae sunt diversarum specierum unius generis existentes, ratio generis ex principio materiali sumitur, differentia speciei a principio formali. 一つの類に屬するが、種を異にする質料的諸事物に於ては、云々。英譯第二卷 in material things of the same genns and differing in species (p. 287) 獨譯第二卷 bei materiellen Dingen der gleichen Gattung und verschiedener Arten (S. 655). 佛譯第二卷 Dans lea réalités matérielles qui malgré leur diversité spécifique appartiennent à un même genre,……(p. 395)

——(3) IV Gent. c. 34. homo existens divinitatis particeps factus est. 人間は神性を分有するものとせしめられた。——(4) In I Met. l. 2, n. 36. scientia sit quaedam scientia circa causas existens. 學は原因に關するところの或知識である。

(一五) I q. 23, a. 2, ad 4. 「本質に屬する」という類例及びそれに似た用例。——(1) De virt. in comm, q. 1, a. 12, ad 16. ratio recta prudentiae non ponitur in definitione virtutis moralis, quasi aliquid de essentia eius existens, その本質に屬する何ものかのものとして、云々。——(2) I Compend. theol. c. 42, n. 76. quasi accidentaliter superveniens intellectui, et non de eius essentia existens 附帶的に知性に附加され、その本質に屬しないものとして。——(3) II Sent. d. 24, q. 2. a 1, ad 2. ad sensualitatem aliquid pertinet dupliciter: vel sicut existens de essentia eius,.... vel sicut praeambulum ad ipsum.——(4) I-II. q. 4, a. 7. ad beatitudinem imperfectam,.... requiruntur exteriora bona, non quasi de essentia beatitudinis existentia, sed quasi instrumentaliter deservientia beatitudini. 至福の本質に屬するもの。——(5) In I Eth. Nic. l. 2, n. 25. Et sic oportet quod ultimus finis pertineat ad scientiam principalissimam tamquam de fine primo et prncipalissimo existentem,.... 第一の最も主要な目的に屬するものとして。——(6) In X Eth. Nic. l. 16, n. 2031. sicut pulchritudo venit iuvenibus non quasi existens de essentia iuventutis, sed quasi consequens bonam dispositionem causarum iuventutis. 若さの本質に屬するものとして、云々。

さてこのようにエクシステレの分詞エクシステンスが、エッセの分詞エンスのかわりに用いられるということは、少くともこの用法の意味に於ては、エクシステレはエッセと同意味であることを證據立てる。而してこの用法に於けるエッセの意味は繫辭としての「である」に外ならぬ。故にエクシステレはその分詞がエンスの代用となる限りに於て、「——である」の意味を示す、ということができる。ところで（c）の諸用例に於ては、エクシステレは明に「——である」の意味だが、（b′）の諸用例に於けるエクシステレは、まだこの語の存立性の意味を保つて居て、從つてその補語とともに「——である」の意味に解されるとともに、また「——として存立する、存在する、ある」等の意味にもとられ得るということを我々はさきに述べた。そこで問題になるのは、「——として存立する、存在する、ある」等と、「——である」の意味とはどのように異るか、またどのように關係するか、ということであろう。——こ

れに對して我々は答える。「――である」ということと、「――として存立する、存在する、ある」ということとは本質的には異らない、と。通常「――としてある」といえば、この「ある」には存在の意味が含まれ、「である」といえばこの「ある」には繫辭の意味が加わると考えられて居る。然しながら繫辭の「ある」と存在の「ある」とは、唯觀點の相違にもとづく「ある」の區分であつて絕對的な區分ではない。いかに繫辭的な「ある」であつても、單に主語と述語とを結合する記號ではなくて、何らかの存在を示して居る。たとえば「ソクラテスは人間である」といえば、この「である」は單にソクラテスと人間という二つの概念を結合する記號ではなくて、「ソクラテスは人間としてある」こと、すなわちソクラテスの存在を示して居る。そして人間という述語は、ソクラテスの存在仕方の限定として附加されて居る。もしこのように考えることが許されるとすれば、「――としてある」という存立性を示すエクシステレと、繫辭の「ある」を示すエクシステレとの間には本質的な意味の相違はないことは明であろう。――たゞ次の點に相違がみとめられる。すなわち「――として存立する、存在する、ある」などと譯される場合には、エクシステレのシステレの意味が强調され、主語の存立のはたらきの方に力點がおかれて居るが、「――である」といわれる場合には、主語のシステレ性よりもその述語的限定の方に力點がおかれ、それだけシステレの意味は弱まつて居る。然しなぜエクシステレに述語的限定が附加され得るかといえば、やはりそのシステレの意味が何らかの形で存續して居るからである。というわけは「立つ」ことは廣く一般的に解すれば、他者から區別されたそのもの「として」ある、ことに外ならず、從つて「何として」立つかを明にする爲に補語としての述語を必要とするからである。故に我々はエクシステレに含まれる「立つ」の意味を中心にエクシステレの意味を考察して、㈠文字通りの具象的意味で「立つ」ことを示す場合。㈡「立つ」ことが廣い一般的意味に解される場合。㈢「何として」立つかを示す補語を必要とする場合、をへて、ついに㈣「立つ」の意味の最も一般化され弱められた場合としての「である」の意味でのエクシステレないしエクシステンスの用法にまで到達したのである。

（一六）なお一つの問題がのこつて居る。それは、なぜトマスは「であるところの」という意味での分詞としてエッセの分詞たるエンスを用いずに、むしろエクシステンスの方を用いるか、という疑問である。實際トマスの著作をしらべて見ると、エンスが形容詞として、あるいは分詞固有の用法で用いられる例はきわめて少い、或は殆んどないといつてもよい。そのかわりにエクシステンスを用いるので、從つてエクシステンスの用例はきわめて多い。この理由を我々は次のように考える。――すなわちトマスに於て、エッセの分詞エンスは「あるところのもの」(id quod est) として術語化され固定化された。エンスはそれが十の範疇に分たれ事物と置換されるものとして解される場合であつても、また實體有としてとられる場合でも、とにかく「あるところのもの」として名詞である。このようにトマスはエンスの意味を名詞として固定化した結果、「であるところの」(being, étant, seiend) という形容詞的分詞の用法にさいしては、エンスのかわりにエクシステンスを用いざるを得なくなつたのである。この點トマスのエンスはプラトン、アリストテレスのオンとは必ずしも同一視することはできぬことを注意しなければならない。プラトン、アリストテレスに於ては、オンは名詞的に das Seiende の意味にも、また時には「ある」(sein) とか「あるところの」(seiend) とかいう動詞ないし形容詞的意味にもとられるのであつて、このように名詞・動詞・形容詞に共通な「ある」の探究こそはプラトン・アリストテレス存在論の課題である。これに對してエンスを名詞的に固定化したトマスに於ては、エンスに對立する意味でのエッセとエッセンチアとが、より一層明確に區別されることとなるとともに、或意味に於て存在論のスコラ的固定化形式化はこゝに一歩をふみ出されたともいわれうるであろう。いづれにせよプラトン、アリストテレスのオンと、トマスのエンスとが必ずしも同一視されえぬことは注意を要する。この問題の詳細なる探究は後日にゆづる。

（未完）

（筆者　大阪市立大學文學部〔哲學〕助教授）

〔本論文前回所載分の正誤表〕

頁	行	誤	正
四〇	終より十行目	副詞節、	副詞句、
〃	終より一行目	副詞節、	副詞句、
四五	始より八行目	類似として	類例として